# 大阪文化の力を見直し 創造的で活力ある社会に

## 大阪文化の危機的状況

**大阪の文化は、『タニマチ』という言葉で表される民間人によって支えられてきた。しかし社会情勢が大きく変化している今、行政(官)や企業それぞれが明確な役割を持って支援することが必要ではないか。あらゆる立場で文化に携わっている方々と現状を検証しながら、将来の可能性を模索したい。また、厳しい経済情勢の中、なぜ文化振興が必要なのか。地域コミュニティ再生のための政策提言である『ニュー・コンパクト』の観点から、魅力的な具体事例を紹介したい ── 議長／帯野久美子**

### 発言者

**旭堂南陵氏(講談師)**
きょくどう　なんりょう／'68年近畿大学入学と同時に先代旭堂南陵に師事。'78年小南陵を襲名し真打ち昇進。'06年4代目南陵襲名。'04年大阪文化祭賞グランプリ受賞。

**加藤種男氏(アサヒビール芸術文化財団事務局長)**
かとうたねお／'90年アサヒビール(株)企業文化部課長就任以来、企業のメセナ活動を牽引。'02年より現職。'04年横浜市芸術文化振興財団専務理事を兼任。

**西濱秀樹氏(関西フィルハーモニー管弦楽団理事・事務局長)**
にしはま　ひでき／関西フィル主催のシンポジウムでの発言をきっかけにして'96年同事務局に入社、企画・営業・広報を担当。'03年より現職。コンサートの司会も手がけている。

**伊東雄三氏(ワッハ上方 大阪府立上方演芸資料館館長)**
いとう　ゆうぞう／'71年毎日放送入社。主にテレビ制作局でスタジオドラマ、藤山寛美・松竹新喜劇、ミヤコ蝶々・中座公演の舞台中継番組を担当。'07年より現職。

**広瀬依子氏(『上方芸能』編集長)**
ひろせ　よりこ／'89年『上方芸能』編集部入社、編集次長を経て'08年から編集長。国立文楽劇場文楽公演専門委員。大阪文化賞審査委員。共著に『上方芸能事典』他。

**土居年樹氏(天神橋筋商店連合会会長　丸玉一土居陶器店代表取締役)**
父の急逝により19歳で店を継ぐ。斬新なアイデアで商店街の活性化に取り組み、天満天神繁昌亭の完成にも尽力。観光カリスマ百選。メセナアワード2009千客万来賞受賞。

**芝川能一氏(千島土地(株)代表取締役社長)**
しばかわ よしかず／住友商事(株)勤務を経て'80年千島土地(株)入社、'05年より現職。

**議　長**

**帯野久美子氏(株)インターアクト・ジャパン代表取締役)**
おびの　くみこ／追手門学院大学、聖ミカエル国際学校卒業。'82年個人翻訳活動を経て'85年(株)インター・アクトジャパン設立。'09年和歌山大学理事・副学長就任。

## タニマチを生み出す環境づくり

帯野氏

**帯野**　文化施設の閉館が相次いでいます。前半は演者や施設側の立場から現状を検証し、議論を行っていきたいと思います。

**南陵**　東京と大阪は経済規模で言えば10対1ほどですが、寄席芸人を比較すると、講談師50人対20人、落語家500人対250人と善戦しています。他の芸能を加えれば、大阪の芸能文化は、さらに大きなものになります。しかもそれらは皆、民の力、タニマチが支えてきたのです。長い伝統に培われてきた文化は早々と消滅はしないと思いますが、将来を考えると、非常に憂慮することがあります。というのは大阪市内の中心部に人が住んでおらず、活気がないことです。これは鉄道会社が郊外型のまちづくりを行った結果だと思います。文化を支えてきた人々が郊外へ流出したことに文化衰退の一因があると私は思っています。船場生まれの私の母によれば、昔、店の主人が文楽に行く際に丁稚をお伴につけてやり、自然と商人言葉や習わしを身に付けさせたそうです。これが文化の底力ではないでしょうか。

南陵氏

**広瀬**　定年後、よく趣味を持っているとよいと言われますが、「65歳になったから文楽へ」と思っても、すぐに親しめるわけではありません。劇場へは、子どもの頃から行きつけていないと、足を運びにくいものです。現状では観客は年配ばかりですが、子どもへの普及に取り組まなければ、将来の観客も育ちません。たとえ受験や就職で一旦鑑賞をやめても、子どもの頃に触れていれば、再び戻って来ると思います。演者養成も大切ですが、芸能は観客がいないと成立しません。観客を育てる土壌を関西の芸能関係者全体で取り組むべきだと思います。

広瀬氏

## 芸術は量より質が問題

**伊東**　年末にワッハ上方の通天閣移転案が見送られ、現地存続案に方針転換されました。逆転できたのは世論のおかげです。ワッハ上方は民放6社によるNPOが指定管理者になっており、吉本もビル所有者として携わっています。難波のあの場所には設立約20年で培った民間の連携、上方演芸の歴史そのものが蓄積されています。ただし、橋下知事は存続条件として「11年度の入場者を8倍の40万人にせよ」という難題を提示しています。ワッハ上方はホールだけではなく、資料館でもあるのですから、集客数ではなく機能や役割で評価してほしいと思います。もちろん我々も集客に尽力しますので、一般の方も支援の一つとして誘い合って来てくださるとうれしいです。

**南陵**　文化は集客数ではなく質で評価すべきですね。最近、アメリカの大学が貴重な明治期の講談本を買い集めていることをご存じでしょうか。肝心の大阪がその価値に気づかないとは残念で仕方ありません。タニマチがいなければ、企業や行政が支援すべきなのに、近鉄がOSK歌劇団を手放した時も支援した企業は皆無でした。民間の力だけで成立が難しいなら、しかるべき支援を行政が考えてほしいと思います。

**伊東**　大阪センチュリー交響楽団が解散の危機に直面した時には、会員数が伸びたのにもかかわらず、最近、再び苦戦しているそうです。市民の無関心さが歯がゆいばかりです。

**帯野**　大阪人にはタニマチ精神があると思っていたのですが現状は厳しいですね。

**伊東**　橋下知事は「繁昌亭が出来たからワッハ上方は不要ではないか」と発言しておられましたが、繁昌亭は落語専門、ワッハ上方は上方芸能全体が対象なので役割が違います。今後、ワッハ上方は資料館としての役割をアピールしていくつもりです。ワッハ上方には、民放から無償貸与された3000本もの音声・映像資料が所蔵されています。著作権のうるさいこの時代に、無料でこれだけ充実したライブラリーが利用できるのは、全国でワッハ上方だけだと自負しています。

伊東氏

**南陵**　ある大学教授がワッハ上方を批判して「東京の寄席小屋は補助金なしで運営しているのに」と述べておられましたが、実は新宿末広亭にも落語芸術協会を通して文化庁の補助金が一部、入っているんです。インテリがそれを知らないのは辛い。

**広瀬**　大阪の民間の力は誇るべきことですが、行政の「民間がやるから、まかせておけばいい」という態度はいただけません。いまだに、府民ホールがないのもその現れです。

## 関西フィルのアートマネージメント

**帯野**　マネージメントする立場から文化支援についてお聞きしたいと思います。

**西濱**　大阪にはプロオーケストラが4つあり、年間動員数は45万人。これはあるアイドル歌手の大阪ドーム公演1週間分と同じです。量では到底かないません。1都市で4楽団あるのは東京以外では大阪だけなので、一つにしようという議論もありました。しかし1都市1楽団は衰退の構図で、ライバルがなくなると成長しません。この4楽団についての市民の認識は低く、楽団の活動も個々に細々となされて

西濱氏

いる印象です。この弱さが大阪の問題点です。オーケストラは、アメリカでは企業がメセナ、ヨーロッパでは国家が支えるという土壌が形成されていますが、日本ではあいまいです。関西フィルの財政は、主に公演等の売り上げと企業支援および一部、府の補助金で成り立っていますが、我々は自助努力も行っており、「①観客の支持、②関西広域での展開、③ブランド力と芸術性向上」を旗印に6か年計画を打ち立てています。そして苦しい財政の中、フランスの巨匠を音楽監督として招聘するなど新たな展開を進めています。オーケストラは、人のつながりを生む文化装置です。我々の夢も伝統芸能の方々と同じく関西の誇りを創出することです。

**帯野**　会場にお越しの来場者の方で、ご意見・質問はありますか?

**来場者（経済界）**　先ほど、企業はゼニ勘定で文化支援しているというご指摘がありましたが、企業が文化支援を行う際は、どうしても費用対効果をもとに協力を考えざるを得ません。無料化しないと集客できないこともあり、それも支援を困難にしています。

**南陵**　昔のタニマチには費用対効果という意識がなかったから、文化が育ったのです。

**来場者（経済界）**　タニマチは個人ですが、企業は団体ですので、社内を納得させるのに費用対効果を論じなければなりません。経営者個人の独創性が生かせるよう説得力を高めていくべきだとは思っています。

**伊東**　私は市民の文化意識よりも、我々の発信力に問題があると思います。

**西濱**　そうですね。市民云々より担い手の向上心が大切で、それを失えばアーティストとしての成長は止まります。大阪人は何でも値切ろうとしますが、値切れば人件費に跳ね返ります。人への投資は値切るべきではありません。楽団公演に220万円の経費がかかるとして、70人のトップ集団の演奏がA席8000円。これを安いか高いか判断せずに値切るのが大阪人です。かつて私財を投じて関西フィルを支援していたある企業家に対して、周囲の視線は非常に冷ややかでした。志ある寄付を小バカにする傾向が日本の社会にはあるんです。官は民まかせで民が出来なくなったら捨てるのではなく、官には制度を整備して支援する役割があるはず。官と民の役割が見えにくくなっています。

## 大阪版『ニュー・コンパクト』を考える

**帯野**　後半は基調講演で紹介された『ニュー・コンパクト』について、具体的に考えていきたいと思います。

**加藤**　『ニュー・コンパクト』は、経済状況が厳しい中、費用対効果ではない考え方でメセナに取り組めないかということで考案されました。疲弊した地域が、文化への集中投資によって再生を果たした別府アートプロジェクト等の例もあり、『ニュー・コンパクト』の大阪版を考えていきたいと思います。例えば『水都大阪2009』の『ラッキー・ドラゴン』は、作家のユニークな自己実現がなされているうえ、イベントとしても成功しています。同じように横浜開港イベントの『ラ・マシン』も好評でしたが、両者には違いがあります。というのは『ラ・マシン』は高い外国製品で、使用の際は道路幅等の条件に合わず、ノウハウが残らなかったのです。『ラッキー・ドラゴン』は作家自作で費用が安く、水路での使用条件も合致し、ノウハウも残ったのでタイに売ることもできました。企業メセナ協議会は07年に日本の文化芸術について10の提言をしています。その要点は、アートの「社会的役割を明確にする」こと。アートは社会再生の切り札であるという認識で「文化を振興するシステムを確立する」こと。提言の背景には、地域社会の疲弊があり、東アジアにおける日本の孤立があります。『ニュー・コンパクト』はその頃より社会情勢の悪化を踏まえ、文化への集中投資による地域再生を提言しています。社会の構造変化に対して、経済振興策だけでは対応できません。市民自治とセクター、地域間ネットワークを推進することで、コンパクトな社会・経済という新たな地域社会像を提案したいと思います。コンパクト経済とは「製造販売の一体化」「小規模経営の維持」「地産地消を中心に置く」「Face to Faceによる顧客管理」によるもので、徒歩圏内での社会充足をさせようというものです。ではなぜその手段がアートなのかというと、圧倒的なヴィジョンの喚起力があり、教育・環境・福祉等すべての人の営みに関われるからです。ここでいうアートは、ハイカルチャー一辺倒ではありません。「アートはエライ」的な発想は、市民から文化を離脱させてしまう。多様性を容認し、ユーモアを大事にしたのがアート。例えば祭りもアートと地域創造が結合した究極のコミュニティ・アートです。一つずつが手作りで非生産的なアートは費用対効果とは対極にある活動ですが、人を繋ぎ、外から人を呼び込むきっかけになります。

加藤氏

**帯野**　府民の意識調査では8割が「芸術文化は必要」と答えているのに集客は

第3分科会

ままなりません。なぜギャップがあるのでしょうか。

**加藤**　目的が人集めという発想自体が変で、メディアスタンダードにこだわり過ぎです。活動の内容が目的で、集客はその結果です。

## 事例1『ナムラ・アートミーティング』と『芝川ビル』

**芝川**　『ナムラ・アートミーティング』は、名村造船所跡地を利用した試みで、04年、小原啓渡氏からの提案があり、30年契約で既存施設を利用した実験的アートプロジェクトを行っています。造船所跡地を核とした北加賀屋にはクリエイターが集まり、空き家を再生した工房なども誕生しています。07年、造船所跡地は経済産業省の近代化産業遺産群に認定され、その翌年からは住之江区役所もここを媒体として地域活性化を始めました。水都大阪2009の『ラッキー・ドラゴン』と『ラバー・ダック』はここで生まれました。『ラバー・ダック』は『水都大阪2009』で八軒家浜に展示されましたが、大人気で全国から人が集まったようです。水都のシンボルにという声もありますし、今後アヒルプロジェクトとして、活用を考えたいと思っています。

『芝川ビル』は昭和2年に建設された近代建築物で、2005年頃から有効活用に着手しています。屋上の増築部を元の姿に再生し貸しホールにしたところ、さまざまなイベントに利用されるようになりました。09年には大阪市HOPEゾーン事業としてレリーフを修復。周辺の近代建築4棟と連携したライトアップも実施しました。

芝川氏

## 事例2　『天満天神繁昌亭』

**土居**　天神橋商店街は早くから空き店舗を利用して寄席や音楽会を定期開催していました。それが商店街に繁昌亭ができた背景になっています。大阪府の紹介で、平成16年に上方落語協会会長の桂三枝氏と会い、常設寄席小屋の開設に商店街も協力してほしいと頼まれました。天満宮の宮司に相談すると「天満には昭和初期まで7軒の寄席小屋があった。その賑わいを取り戻したい」と無償で敷地の提供を申し出てくれました。大阪府からは「赤字になる」と忠告されましたが、私たちはこのチャンスに賭けました。言い換えれば、行政ならやらなかったことなのです。

土居氏

約2億円の建設費は寄付でまかなうことになり、信頼性を高めるために知事（太田房江氏）や商工会議所会頭（野村明雄氏）に発起人になってもらいました。寄付金一口一万円で提灯に名前を記入するようにしたところ、一般市民からたくさん申し込みがありました。企業から緞帳等の寄付もありました。すべてが民間の力です。オープンから3年たった今も客足が落ちないのは、皆に「自分がお金を出した小屋」という思い入れがあるからだと思います。想定外だったNHK朝ドラ『ちりとてちん』の制作・放映も追い風にもなりました。我々は自分の持っているものを伝えることが商売だと考えています。理想とするのは、消費だけでなく、雰囲気も楽しんもらえる街。商店街の健全化は社会の安全にも繋がっています。

## “ニュー・タニマチ”の仕掛けづくりを

**南陵**　各地にある“地域寄席”は、まちの人と演者が一緒に取り組む、ニュー・コンパクトの実践ですね。

**広瀬**　住むことによって愛着が生まれ、文化が育つと再認識しました。

**西濱**　オーケストラは“にぎやかし”でありたいですね。関西フィルも商店街で演奏するなど、ホールから外へ出た活動もしています。

**加藤**　「皆で話し合う」、「非大量消費志向」、「製造と販売の一体化」など、天神橋商店街のやり方は、まさにコンパクト経済ですね。また、『ラバー・ダック』は、ユーモアの視点を与えることでいつもの光景を一変させている。これも『ニュー・コンパクト』が目指すものです。

**帯野**　文化は行政や経済界だけが支えるのではなく、市民一人ひとりが誇りを持って“ニュー・タニマチ”として行動する、仕掛けづくりが必要だと感じました。本日は、ありがとうございました。

ラバー・ダック（F.ホフマン）

ラッキー・ドラゴン（ヤノベケンジ）

天満天神繁昌亭

関西・大阪 文化力会議

# まちの活性化に、民の力をどう活かすか

## 事例から見る、大阪のまちの賑わい

**2009年秋のリーマンショック以降、企業の業績悪化や自治体の財政危機など大変厳しい市況が続いている。しかし『水都大阪2009』の成功からもわかるように、大阪の民力は大変元気である。この土性骨を明らかにしたい。まずは実際にまちで活躍されている方々のご意見を伺いたい。加えて、大阪あるいは関西の中期的なビジョンに対してどのような課題が待ち受けているのかを明らかにしつつ、具体的な実現プロセスの手立てを模索したい―**
**議長／佐藤茂雄**

### 発言者

**小嶋淳司氏（がんこフードサービス（株）代表取締役会長）**
こじま あつし／同志社大学経済学部卒業、'63年がんこ寿司創業。'69年法人設立、代表取締役社長に就任。'05年同社代表取締役会長に就任。

**大西 隆氏（船場げんきの会 代表世話人）**
おおにし たかし／'06年（株）大西代表取締役会長就任。'09年より『船場げんきの会』の代表世話人に。'07年財務大臣表彰受賞。

**伴 一郎氏（伴ピーアール（株）代表取締役）**
ばん いちろう／企業広報のコンサルティングや販売促進の企画制作ほか、大阪のPR活動にも力を入れる。'03年水都大阪再生の一環として舟運事業部を設立。

**室井 明氏（『水都大阪2009』実行委員会事務局長）**
むろい あきら／東京大学工学部都市工学科卒業、'71年関西電力（株）入社。現在、同社の顧問ならびに『水都大阪2009』実行委員会事務局長を務める。

**泉 英明氏（NPOもうひとつの旅クラブ理事長）**
いいずみ ひであき／'71年生まれ。大阪大学工学部環境工学科卒業。株式会社環境整備センターを経て'04年より現職。有限会社ハートビートプラン代表。

**日比哲夫氏（船場げんきの会 副代表世話人）**
ひび てつお／東京大学法学部卒、'65年大阪ガス（株）入社。'94年同社支社長、'97年（株）きんぱい社長等を経て、'06年（株）コーディネイツ大阪設立・同社代表取締役社長。

**山部 茂氏（南海電気鉄道（株）専務取締役、ミナミまち育てネットワーク総務委員会委員長）**
やまべ しげる／京都大学工学部交通土木工学科卒業、'73年南海電気鉄道（株）入社。'05年同社専務取締役執行役員就任。経営政策室長、難波街づくり推進室長。

**中井 計英氏（ミナミまち育てネットワーク企画委員長代行）**
なかい かずひで／'74年（株）髙島屋入社、現在、同社総務本部総務部・関西エリア長。ミナミまち育てネットワーク企画委員長代行として、観光集客・文化振興を目的に多様なイベントの企画立案実施を推進。

**山崎 亮氏（studio-L代表取締役）**
やまざき りょう／'73年生まれ。公共空間のデザインに携わるとともに、完成した公共空間を使いこなすためのプロジェクトマネジメント等にも多数かかわる。

### 議長

**佐藤茂雄氏（京阪電気鉄道（株）代表取締役CEO）**
さとう しげたか／京都大学法学部卒業、'65年京阪電気鉄道（株）入社。'07年同社代表取締役CEO取締役会議長就任。'10年1月大阪商工会議所次期会頭に内定。

## 大阪の食文化をアピール

**佐藤**　まずはお一人ずつ、現在のご活動についてご紹介いただきたいと思います。

**小嶋**　昨年（2009年）5月に開催された、『食博』についてご紹介します。『食博』とは、1985年の第1回から「宴」をテーマに、4年に一度大阪で開催している食の博覧会です。昨年で7回目を迎え、11日間で約64万人の来場がありました。催しを始めた理由については3つあります。大阪は「くいだおれのまち」といわれていますが、その核になるものが無いのでは?と思ったんですね。そこで催しを、ここで食の商いをさせてもらっている我々が主催することで、やはり大阪には「くいだおれ」の実体があったのだと知っていただきたかった。2つめは料理人の技能向上、3つめは海外との交流です。十数か国から出店があり、「食」を活用した観光プロモーションを推進する各都市との交流を通じて、大阪の魅力的な食文化をアピールできていると考えます。また、夏の大阪の夜空を彩る『なにわ淀川花火大会』は、今年で22回目を迎えます。昨年は56万人の観客が淀川河川敷を埋めました。この大会は17年間続いた『十三どんとこい祭り』を発展させたもので、私はこの祭りが始まった頃からかかわり、現在は大会運営本部長を務めています。これだけ大規模のものを行政に頼らず、すべて地域住民の力で行っているところは全国的にも珍しい。天神祭に並ぶ、夏の大阪の風物詩になってきた自負があります。

小嶋氏

食博覧会

大阪ミナミ映画祭
（2009年10月17～24日）パンフ

## ミナミから大阪の再生を目指す

山部氏

**山部**『ミナミまち育てネットワーク』の活動についてご紹介します。これは2008年12月に『ミナミまちづくりフォーラム（代表者：三和実業（株）松本孝氏）』と『ミナミ活性化委員会（代表者：（財）大阪21世紀協会 堀井良殷氏）』の2つが統合しパワーアップしたもので、ミナミに関係する企業や大学、商店会など125団体が参加しています。活動の目的は「観光集客」と「文化振興」をテーマに、ミナミから大阪の再生を目指すものです。ミナミは関西国際空港と直結するなど立地も良く、さらには歌舞伎や文楽などの大阪の古き良き伝統が根づいています。また近年は、日本橋を中心に「アニメ村」などの新しい文化も育ってきています。そうした進取の気性に富んでいるものを育てながら、さらには「くいだおれのまち」にふさわしい豊富な食文化など、多種多様な文化をより高めるとともに、さらなる街の活性化に取り組んでいきます。昨年（2009年）は、難波八阪神社の船渡御、大阪ミナミ映画祭、シンポジウム、ジャズフェスティバル、CGアニメ祭りなどを開催しました。ジャズを核としたまち育てのプロジェクトは、経済産業省の平成21年度『広域・総合集客サービス支援事業』に採択されました。今後はジャズを中心としたイベントなどを、事業の大きな柱として育成していきたいと考えています。

## 『水都大阪』の今後の方向性

**室井**　昨年8～10月に開催した『水都大阪2009』では、来場者目標100万人に対して約190万人。参加者数も約7万9千人ということで、かなり多くの方々に『水都大阪』の魅力を知っていただき、まちのブランドイメージが確立できたのではないかと思っております。今後の方向性について、個人的な意見も踏まえながら述べたいと思います。第1に『水都大阪』の都市ブランドを定着させるための継続的な取り組みが必要であること。第2に、都市づくりに熱意を持つ市民の活力やネットワークを今後どう生かしていくか。それには仕組みづくりが大事だということで、市民が協働できるプラットフォームづくりを提案したいと思います。第3は、官民融合による都市再生の事業スキーム。つまり、官と民が一緒になって大阪を元気にするには、民はビジネスというスキームで頑張ります。企業が儲かれば税収を通して行政にもお金が入り、ひいては行政サービスや市民サービスも上がります。「都市再生を事業再生という観点から考えませんか」という提案です。本組織は2010年3月で解散しますが、来年度は新しい仕組みで継続していく議論が進んでおります。初仕事としてはまず、都市再生ビジョンを作ること。そのためにも、いま申しました3点について考えるべきだと思っています。

室井氏

## 中之島公園を“市民の舞台”に

**山崎**　『水都大阪2009』では、『水辺の文化座』というイベントで全国から160人のアーティストに集まっていただきました。これらアーティストの作品制作補助や関連イ

山崎氏

「水都大阪2009」中之島公園会場（バラ園）

有馬富士公園でのワークショップ例
（林の道づくり）

ベントの運営補助にあたったのが、約350人のサポーターです。私の役割は、支援を効果的に活かせるよう采配することでした。当然ながらさまざまな方と仲良くなり、イベント終了後に多くの人から「もっと中之島で何か活動したい」と言ってもらえたのが嬉しかったです。室井さんのお話にもあったように、『水都大阪』は、ぜひ何らかの形で継続していきたいと思っています。では、継続に必要なのは何なのか?大阪の水辺で「何かしたい」と思っている人たちをイベントの時だけじゃなく、普段から公園を楽しくする担い手となってもらえれば。そんな仕組みが出来たらいいと思います。これを『パークマネージメント』と呼びます。じつは約10年前、有馬富士公園(兵庫県三田市)でこの計画を実施したことがあり、来園者数も年間40万人から75万人に増えました。平日も週末もいろんなサークルやNPO団体が、有馬富士公園を“自分たちの舞台”として使い、さまざまな活動やワークショップで来園者を楽しませています。中之島公園も、普段から情報発信がなされる面白い場所にしていきたいですね。

## 『北浜テラス』と『OSAKA旅めがね』

**泉**　『水都大阪2009』では、大きく『北浜テラス』と『OSAKA旅めがね』の2つで携わりました。まず『北浜テラス』ですが、これは土佐堀川沿いに川床を作る一大プロジェクトで、民間による公共ストックの利用計画としては全国初。準備から開業までは約2年。我々は建物オーナーやテナントに対し事業コーディネートや技術支援を行い、行政・学識経験者は許認可や規制緩和のしくみを、商工会議所は常設スキームの規制緩和の仕組みなどを検討いただきました。平成20年度に1か月間限定で実験的に営業し、『水都大阪2009』で常設化。現在も3店舗が営業しています。次に『OSAKA旅めがね』。これは『水都大阪2009』のクルーズ&ウォーク企画として事業実施にいたった、地元案内人が大阪を案内するという新しい観光プログラムです。現在も好評進行中で、コースを作るエリアコーディネーター、案内するエリアクルー、地域の協力者などを合わせて約200人の協力を得ることができました。また観光船事業者にもクルーズ協力を頂いたりと、いろんな方々に支えられています。ボランティアや助成金頼りでは継続困難な可能性もあるので、次の一手をどう打つかをつねに意識しながらやっていきます。その蓄積が、市民一人ひとりが水都の想いを蓄積していくことにもつながると思います。

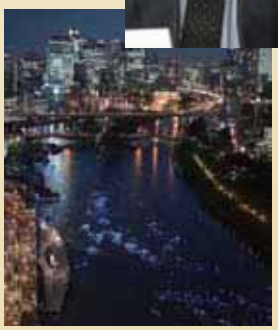
泉氏

大阪川床『北浜テラス』／2008年10月1日～31日

## 天の川プロジェクト、本格実施へ

**伴**　昨年(2009年)7月7日、『天の川プロジェクト～100万人の願いをかたちに～OSAKA天の川伝説2009』という社会実験を行いました。これは大阪市内を流れる大川を天の川に見立て、八軒屋浜の船着場から、下流に向けて約2万個の発光ダイオード(LED)ライトの入った球を流し、光り輝く天の川を演出するというものです。もともとこのイベントは「大阪が世界に発信できるものはないのか」という議論から始まりました。歴史を遡って調べた結果、水の祭典「天神祭」がその昔、七夕の日を始まりとしていたこと、大阪天満宮では七夕の故事を今に伝える「星愛七夕まつり」が毎年行われていることなどから、大阪の新しい夏のイベントを実現していくことにつながりました。古代から、日本には水に映した星を愛でる文化がありました。「星に願いを」と一人ひとりの願いを届けるとともに、普段見られることのない川面を見つめる機会を提供することで、かけがえのない水環境への感謝の気持ちを醸成することもめざしています。開催地を天満にしたのは、天神祭の地元であり“天(星)に満る地”が由来であるため。今年から本格実施する予定で、すでに「うちでも同じような催しを行いたい」と京都や東京、福島などから問い合わせが来ています。

伴氏


大川に一夜限りの
天の川(平成OSAKA天の川伝説)

## 商都大阪・船場のまちを元気に

**大西**　2004年9月設立の『船場げんきの会』には、船場をステージに活動する23団体が所属しています。それぞれの活動を支え合い、皆が動きやすいようなプラットフォームの役割を果たそう、というのが基本コンセプトです。グループは「歴史・文化・芸術」「まちづくり」「ビジネス」にわかれ、それぞれが船場のまちの元気につながる企画を提案。お互いの協力のもと、お祭り、フォーラム、大学との連携活動、アートギャラリーなど、毎年多数のイベントを実行しています。昨年は初めて、船場センタービル連盟、大阪久宝寺卸連盟、せんば心斎橋筋協同組合、大阪船場丼池卸連盟が管轄する4商店街が共同し、『船場まつり』を実施しました。9月14日～21日の8日間で1000店以上が連携。大規模なセールのほか、船場センタービル内でもファッションショーやセミナー、物産展などのイベントが行われ、

大西氏

船場元気の会

さらには船場にある4つの神社にも参加いただき神輿や太鼓などの“お宝”も展示しました。今宮戎神社もイベント参加し、福娘たちに商店街を練り歩きながら餅を配っていただきました。また『船場まつり』と同じ時期に、船場を知ってもらう『せんば検定』も実施。これは『大阪検定』の企画会議座長でおなじみ、大阪府立大学の橋爪先生に作っていただきました。

## 市民力を活かすプラットフォーム

**佐藤**　後半は、ご来場の方々のご意見も交えながら議論したいと思います。皆さんは、全体像として「どんな大阪にしたい」という思いがおありですか?

**日比**　皆さんのお話を聞いて、民がこれだけ頑張れるのは大阪の特徴だなと再認識しました。この活力を生かして行政とつながり、いろんな仕組みを考えていけばよいのでは。

日比氏

**室井**　現在は都市間競争の時代。勝ち残れない都市は廃れていく。フランスのリヨンは光、ナントはアートや文化という切り口で売り出しています。大阪はやはり「水都」をブランドにするべきでしょうね。

**佐藤**　会場からご意見があるようです。どうぞ。

**来場者** 大阪といえば「くいだおれ」ですが、この言葉を海外から来られる方々はどれだけ理解しているでしょうか。カルチャーの意味も込めて「食文化の都市 くいだおれのまち大阪」としてはどうか。また、御堂筋パレードがなくなったことを、府民も市民も大変残念に思っています。府が無理なら市やその他の団体が中心となってやれませんか。水を利用したまちおこしなども積極的にお願いしたい。

**小嶋**　『食博』の実行委員である私の立場から申し上げれば、食は文化。食を通じて都市格を上げていきたいと考えます。私は何十年と食に携わっていますが、今でも初めて見る食材があるんですよ。それが大阪で見られるのは昔からここが「天下の台所」といわれる食の情報と物流の拠点だったからです。大阪を、大阪人が誇りに思える食の都にしていきたいですね。

**山崎**　イベントの件ですが、行政がお金を出さなくなったから残念、ではなく、大きなイベントが無理ならNPO団体や市民が小さなイベントに刻んででも毎月できるものにしていく方法もあるんじゃないかと思います。その際にプラットフォームづくりが重要になってくるんですね。さらに個々のプラットフォームが有機的に結びつく「大水都大阪プラットフォーム」みたいな仕組みができると、また違ったフェーズで大きなことがやれるのではないでしょうか。

**泉**　我々の『OSAKA旅めがね』にも、いろいろな参加者がいます。それぞれのプラットフォームがつながれば、旅だけでなく「水」や「食」などのテーマにも乗りやすい。

## 文化活動と経済効果

**来場者（企業関係）** 中小企業の立場からすると、大阪の文化とビジネスは切り離して考えられません。文化活動に経済効果はあるのでしょうか?

**佐藤**　確かに経済効果が出ないと意味はありません。ちゃんと出ているんですよね?

**小嶋**　『食博』は12日間で220億の直接経済効果があります。継続することで日本最大の食の祭典になりえますし、その“日本一”を大阪で開催することに大きな意味があると思います。

**室井**　『水都大阪2009』については、大阪府立大学の荒木先生が試算されたものを紹介します。事業費が約9億、宿泊や飲食などの経済波及効果が約67億、パブリシティ効果として約13億。これは水都大阪がメディアに掲載され、お金に換算した金額です。税収効果は国と地方税を足して約7億。総合的にみると大きな経済効果があったと判断できます。

## 行政と民間の役割と協働

**佐藤**　『水都大阪2009』では、アート船『ラッキードラゴン』も非常に好評だったと聞きました。その後はどうなりましたか?

**伴**　置いてあります。復活を願って存続させたいのですが、どこに停泊させるのか、また火を噴く構造上の問題など、行政や法律、お金がからむさまざまな問題があります。市民の力で何とか残したいですね。

**佐藤**　花火大会もいろんな課題があるんでしょうか。行政と民間との役割をどう分ければ上手くいくかなど、具体的な解決策をお示しください。

**小嶋**　全国の花火大会はほとんどが行政の費用で開催されています。しかし我々の場合は例外が1回のみで、後はすべて民が費用を捻出してきました。毎年事業費は約2億5〜7千万。ほぼ地元の人の工夫で賄い、資金も数千円からの寄付や財界からの応援で成り立っています。しかし、問題は行政とのかかわり。規制やその他をやはりスムーズにしてもらいたいし、例えば大阪市であれば、地下鉄の駅に無料でポスターを貼らせてもらうだけでも非常にありがたいんですが。

**室井**　私も行政には、水辺を使う場合の規制緩和を長期的な視点から考えていただきたいし、各行政の部門間横断の連携もお願いしたい。

**来場者3（行政関係）** 『水都大阪2009』では規制その他でご迷惑をかけたこともありました。しかし皆さんの熱い思いに動かされ、結果的に規制緩和につながったものもいくつかございます。プラットフォームについては行政も前向きに参画していきたいと考えます。

**来場者3（行政関係）** 私も、従来の縦割り行政の意識を変えるべく局横断的に取り組んできたつもりです。『水都大阪2009』では市民との協働や横の連携など、大きな輪が広がったと思いますので、その輪をさらに広げていきたいです。

**佐藤**　行政も変わりつつあるなという感じは、私もいたします。だいたい議論が出尽くした感がありますが、民力を生かす方法についてもう少しお聞かせください。

## 大阪の魅力を民の力でアピール

**小嶋**　例えば『なにわ淀川花火大会』では、当日1000人、翌日の清掃に1000人、計2000人のボランティアがいます。掃除だけで800万ほど節約できますし、大変ありがたい大きな力です。

**山崎**　2000人の力とは、勇気づけられ

る話ですね。ボランティアには、大きな目標に向けて無償で手伝う人と、自分たちの自己実現のためにやる人がいます。後者をわかりやすく言うと“掃除はしたくないが皆の前で演奏会はしたい”ですね。それぞれが活躍できるシステムが整うと、『水都大阪』の後の中之島公園も賑わうのではと思います。また『船場げんきの会』のように、それぞれの地域でプラットフォームがありますが、各プラットフォームを結びつけるのに最初にやるべきことは、泉さんや室井さんからも提案があったように、『水都大阪』の全体ビジョンを話し合うことではないかと思います。将来こういう大阪になったらいいね、という話し合いは、イメージの共有のために必要ですね。

**山部**　先ほどからプラットフォームの話が出ていますが、ミナミはいかにも大阪らしいところで、『ミナミまち育てネットワーク』にもいろいろな方々が参画していただいています。今までは官があって企業があって市民があって、と、それぞれが別々の世界にいた感じがするんですが、ここでは企業も一市民。これからのまちづくりとしては、企業の従業員が地域に参加したい活動があれば、それは福利厚生として参加させる。従来のように協賛金や寄付などを募る形はもう古いと思いますね。

**大西**　『船場げんきの会』では苦労もありましたが、5年間の積み重ねで、大勢の人を巻き込み面白いことがやれました。これを集約し、都市の活力や経済発展にどう結びつけていくか。そのために民と官の役割を追求していきたい。

**伴**　『平成OSAKA天の川伝説』も今年7月に本格実施します。昔から言うじゃないですか「大阪の血沸き肉躍り骨笑うまでやろか」と(笑)。まつりは理屈やないんです。天神祭だって面白いから1058年間も皆がお金を出し合って、民がプロデューサーになって開催しています。大阪でも何が文化なのか原点を探りながら、いろんなことを仕掛けていきたいですね。水の都じゃなく、目隠しをして「見ずのみやこ」にならんように(笑)。

**佐藤**　さまざまなご意見、どうもありがとうございました。

## 関西・大阪文化力会議　合意事項

**本会議は山崎正和氏と加藤恒夫氏の基調講演「関西・大阪文化振興について」、「文化力を高め、地域を豊かに」を受け、各分科会で以下の方向性を確認した。**

### 社学連携(第1分科会)

■いま、大学には社会・経済への貢献、知的蓄積の社会還元が求められている。一方、合理主義一辺倒のパラダイムから脱却し、生きていくために必要な“知恵”を学ぶ場を望む声も大きい。

■多様な学びの場を大学および地域に展開することで、多彩な人材を育成し、芸術や文化の裾野を広げ、情報力や知的体力のあるコミュニティを醸成していく。大阪が育んだ懐徳堂精神を発揮し、地域に市民が自発的に学ぶ場、創作や表現活動の場づくりを、官民一帯となって進める。

### 大阪の守るべきもの(第2分科会)

■伝統とは、単に古いものを守ることではなく、革新との関係性で捉えるべきもの。時代の感性や情勢に合わせて変え続けていかなければ残っていかない。天神祭をはじめ、大阪の祭事には、観客を夢中にさせるコミュニケーションの仕掛けが込められている。こうした知恵や工夫、アイデアやノウハウに目を向け、再活用・復興し、新たなストーリーを付与して“伝統”を活性化することが必要。

■大阪・関西の都市格向上のキーコンセプトとして、(関経連の提唱する)「はなやか関西」を挙げたい。「はなやか」には、美しい、きらびやかというだけでなく、際立っている、くっきりしているという意味が込められている。文化とは、心の満足を与えるもの。住み手が満足している所には、遠くからも人が集まってくるもの(近きが喜べば遠きより来る―『論語』)。そんな、活力ある「はなやか関西」を、市民が中心的な担い手となって構築していく機運を盛り上げたい。

### 誰が支える大阪の文化(第3分科会)

■関西が育んできた固有の文化は、いま絶滅の危機に瀕している。グローバルな都市間競争がいっそう激化する中で「文化のないまちは崩壊する」という危機感を持ち、関西は文化による都市活性化を最重点戦略と位置づけるべき。

■文化活動には、行政からの補助に加え、企業メセナの振興も必要である。さらに、関西人が培ってきた町衆精神を呼び覚まし、市民による文化サポーター「市民タニマチ」運動を提案する。マネジメント手法を進化させ、伝統を守りつつ新たな創造に取り組み、広く市民の理解を得る自助努力が必要。

### 民がつくる大阪のまち(第4分科会)

■文化力を生かしたまちづくりのためには、市民やNPOの知恵や力を発揮できるプラットホーム(中間組織)の育成と、これらのプラットホームがゆるやかに連携できる場づくりが急務である。自治体にはこうしたプラットホームに対応するワンストップ窓口の開設を求める。

■これからの都市づくりには、民や主体となったビジョンづくりが欠かせない。「水都大阪2009」の開催は、市民に新たなライフスタイルの可能性を予感させた。水都再生の機運をさらに醸成するには、市民が共感し、参加したくなるような、民の発想で生まれた行事を継続、発展させていくことが大切であり、市民を挙げて以下のことを支援する。

・「なにわ淀川花火大会」
・「平成OSAKA天の川伝説」
・「水都大阪2009」のシンボル「ラッキードラゴン」の活用

# 各国総領事を招き、関西・大阪の文化力をアピール

**午後1時から5時間におよぶ『関西・大阪文化力会議』の終了後、各分科会の参加者や在阪の各国総領事ら約250名による交流会を開催。大阪文化祭賞受賞者によるピアノ演奏などが行われた。**

## 著作権フリー映像を贈呈

堀井良殷大阪21世紀協会理事長（左）より、インドネシアやオーストリアなどの在関西総領事、名誉総領事に『BEAUTIFUL KANSAI』のDVDを贈呈。堀井理事長は、「関西・大阪には19か国の総領事館があり、それ以外に名誉総領事館が56か国ある。このネットワークを生かして関西・大阪のブランド力向上にご協力いただきたい」と語った。

『BEAUTIFUL KANSAI（DVD／16分）』
大阪、京都、神戸、奈良の見どころを紹介。関西国際空港でも上映中され、関西・大阪の知名度アップのため著作権フリーにして自由に使えるようにしている。大阪21世紀協会が企画・制作。

## 大阪21世紀協会発行
## 『多士彩才』発刊披露

大阪21世紀協会は、大阪の文化振興に活躍するアーティストやプロデューサーなどを紹介する事業として、協会ホームページ（大阪ブランド情報局）に『多士彩才（たしさいさい）』コーナーを設けている。ここに掲載されたことがきっかけで、テレビのドキュメンタリー番組になった人もいるほど注目度は高い。元朝日新聞編集委員の七尾隆太氏をはじめ協会スタッフらが、2年間にわたって取材した75人を1冊の本にまとめて出版した。

『多士彩才・人こそ力@大阪のまち』
発行：（財）大阪21世紀協会（2010年2月1日第1刷）
発売：（株）新風書房　A5版・231頁・1700円

## ショパン生誕200年を記念して代表曲を披露
## 岩本恵理さんピアノコンサート

厳寒のワルシャワから、『関西・大阪文化力会議』にかけつけてくれた岩本恵理さん。2010年3月1日はショパンの生誕200年にあたることから、『英雄』など有名な4曲が披露された。

岩本さんは奈良県出身。2000年に相愛大学音楽部ピアノ専攻を首席で卒業後、約8年にわたりヨーロッパに留学。ポーランド国立ワルシャワ・ショパン音楽院、スイス国立ベルン芸術大学コンサートクラスなどを最優秀の成績で卒業し、'01年第9回ミロシ・マギン国際ピアノコンクール（フランス）や'05年第6回シマノフスキ国際コンクール（ポーランド）で最優秀賞を受賞するなど評価は高い。2009年春にリサイタル「シマノフスキの軌跡」を東京・大阪・京都で開催。その大阪公演で大阪文化祭賞奨励賞を受賞した。

企業メセナ最前線

# 南海電鉄会長兼CEO 山中 諄氏に聞く

**運輸、不動産、流通、レジャー・サービスなど、63社・従業員約7,800人の南海グループの中核である南海電気鉄道株式会社（資本金637億円）。平成22年に創業125年を迎える同社のトップ・山中 諄代表取締役会長兼CEOに、同社のメセナ・社会貢献活動について聞いた。**

**山中 諄（やまなか まこと）氏**
南海電気鉄道株式会社代表取締役会長兼CEO
昭和18年三重県出身、同40年立命館大学卒、南海電鉄入社。平成13年同社代表取締役社長、同19年より現職。(社)関西経済同友会代表幹事（平成21年～）、ミナミまち育てネットワーク会長（平成20年～）、立命館大学交友会会長（平成16年～）など要職兼務。

## CSRを柱に沿線地域の活性化を

●御社での社会貢献活動やメセナ活動をどのようにお考えですか。

私は、現在南海グループが取り組む3か年経営計画の策定時に、CEOとしてCSR（企業の社会的責任）をその柱に据えました。もとより鉄道事業そのものが社会貢献に直結していますから、私たちの沿線地域に対するCSRの意識はとても強い。そこで私たちは、今後さらに沿線地域の発展に貢献すべきだと考え、メセナ活動も積極的に行っています。

●社会貢献活動の具体例をお聞かせください。

3か年経営計画の基本方針のひとつに、環境保全への取組み強化をあげています。鉄道そのものが環境にやさしいわけですが、当社を含めたグループ主要3社で$CO_2$を3%削減する目標に取り組んでいます。また、護摩壇山（奈良県）に自社所有する525haの『なんかいの森』の育成や大阪府堺市臨海地域の『共生の森』など、沿線地域での緑化・植林活動も支援しています。私を含め当社の役員・社員で『なんかいの森』で間伐作業をボランティアで行っています。さらに、省エネ車両の導入やターミナルビルでの省エネ対策にも力を入れています。

なんかいの森（前列左から5人目が山中氏）

●メセナ活動はどのようなことをされていますか。

大阪フィルハーモニー交響楽団への支援として、1991年に大阪市西成区の当社所有地内に専用練習場『大阪フィルハーモニー会館』を提供し、大フィルと協働で『南海コンサート』を沿線のホールで毎年開催しています。また、沿線の大学と提携して一般公開の『沿線フォーラム』を年2回のペースで開催。その他、指定管理者として運営している大阪府立体育会舘で沿線のバスケットボールやバレーボールなどのプロスポーツチームと協働し、子どもたちを対象にしたスポーツ大会や教室を開催しています。

●ミナミのまちづくりについてどのようにお考えですか。

当社の沿線文化も従来の伝統的な要素に加え、関西国際空港の開港や高野山の世界遺産登録、大阪湾岸部でのパネルベイなど、近年新たなイメージが備わってきたと思います。そして『なんばパークス』の開業は、難波・ミナミのイメージを大きく変えました。かつては場外馬券売場しかなく平日は閑散としていたのですが、いまは一変して家族連れや年配の方々、カップルなどで賑わっています。

そうした人たちは、高価な買いものだけが目当てではありません。おにぎりを買ってパークスでひと休みしたり、時間つぶしにぶらぶらしている人も多い。私はそれこそが本来のまちの姿だと思います。経済合理性を追求するビルだらけのまちは落ち着かない。その意味で、まちなかに緑をつくることはとても大切ですね。また、昨年は難波駅構内の広場を『なんばガレリア』に改装し、念願の屋根のある回遊空間をつくりました。

繁華街の顔をもつミナミは、一方で歴史文化の薫りもある。まちづくりには、そうした個性を活かすべきだと考えます。

なんばパークス

なんばガレリア

高野山への山岳観光列車『天空（てんくう）』

# 上台誌舞

## 雅楽

中国の唐や朝鮮半島から伝来した舞楽・伎楽をもとに発展し、宮中、南都、四天王寺に楽所が置かれた。天王寺楽所は明治初頭に断絶したが、雅亮会が伝統を引き継いだ。聖霊会の舞楽は重要無形民俗文化財。

天王寺区に「伶人町」という地名があるでしょう? 明治初頭まで四天王寺で雅楽を演奏する楽人（伶人）が住んでいたので、そういう名が付いたんですよ。

四天王寺の雅楽は推古天皇二十年（六一二）、百済の味摩之が伝えた伎楽（楽器演奏を伴う無言仮面劇）がもとになっているとされています。『聖徳太子伝暦』によると、聖徳太子が秦河勝の息子や孫に味摩之から伎楽を習うように命じたとあり、それゆえ天王寺楽所の楽人は秦氏の末裔といわれています。

かつて唐や百済からの船は瀬戸内海を通って難波津に到着し、陸路、都のある飛鳥へ向かっていました。当時、四天王寺は外国使節をもてなす迎賓館的な役割もあり、歓迎のために伎楽が披露されていたようです。外国の貴賓は壮大な七堂伽藍で伎楽を堪能し、日本を文化国家だと見直したことでしょう。

前置きが長くなりましたが、「蘇莫者」は、天王寺楽所を代表する雅楽の演目の一つとして、伶人の薗家に代々相伝されてきました。一時廃絶した時期もありましたが、江戸時代に再興され、太子のご命日に行われる聖霊会では必ず舞われています。他の雅楽団体で伝承しているところはなく、四天王寺以外で上演しているのは近年復活させたものです。

聖霊会の雅楽奉納は六時堂前の石舞台で行われます。最初に聖徳太子に扮した横笛の主奏者が舞台の隅に立って独奏します。古来、横笛は太子御作の京不見御笛が使われることになっていましたが、非常に古いものですので、現在は主奏者が自前の横笛を用いています。ただ形式だけは残っていて、役付きの僧がお練り行列の時に京不見御笛の箱を伶人に渡す所作があります。

横笛が奏でられると、音色に誘われるかのように長い白髪と帽子、蓑といういでたちの老猿が現れ、面白可笑しく踊ります。

この蓑一つをとっても意味するところに諸説あり、中には「サマルカンドの雨乞い踊りに由来することを示す」というユニークな説もあります。また「蘇莫者」とは「トルファンの女性用の帽子の意味ではないか」という説もあります。

雅楽のルーツの一つは唐楽にあり、唐楽は胡俗楽とも呼称されるように中国の伝統的な宮廷の音楽舞踊に加えて、シルクロードの芸能の影響も受けています。雅楽の中には、そういった多様な異国文化が息づいているんです。

### 創建時から四天王寺に伝わる舞

## 蘇莫者

案内人　天王寺楽所 雅亮会 楽頭　小野功龍

聖霊会舞楽大法要　4月22日午後1時～／四天王寺 六時堂前石舞台

### 由来

**「蘇莫者」**

聖徳太子は常々、飛鳥と四天王寺を愛馬・甲斐の黒駒に乗って行き来しておられました。ある時、太子が大和川の亀の瀬と呼ばれる浅瀬を渡られる際、馬上で横笛（洞簫）を吹かれたところ、老猿に姿を変えた信貴山の神が現れ、笛の音に合わせて舞い踊りました。その様子を太子が伶人に命じて作らせたのが「蘇莫者」です。太子ではなく役の行者が大峯山を下る時に笛を吹いたとする伝承もありますが、四天王寺では太子説を伝承しています。また曲中に用いられる八（夜）多羅拍子は、2拍子と3拍子の混合拍子でリズムがとりにくいことから、「やたら」という言葉ができたとされます。

**●四天王寺**

地下鉄「四天王寺前夕陽ケ丘」下車、徒歩5分。
大阪市天王寺区四天王寺1-11-18
☎06−6771−0066
http://www.shitennoji.or.jp
天王寺楽所　雅亮会
http://www.garyokai.org

**小野功龍**（おのこうりゅう）

天王寺楽所雅亮会楽頭、理事。相愛大学名誉教授で音楽学研究家として知られる。雅亮会は、天王寺楽所消滅の危機に際して木津・願泉寺の小野樟蔭師が残留した楽人や篤志家を集めて明治17年に設立。四天王寺、住吉大社、今宮戎神社等の行事に出仕するほか、海外公演も行う。功龍師は樟蔭師の孫で小学1年から雅楽を習得。

## 楽屋 よもやま話

# 自然な音、呼吸するようなリズム

**大学で長く音楽学の教鞭をとっておられた小野功龍さんのお話は、理論的でわかりやすく非常に面白い。雅楽の難解なイメージが氷解していく思いがする。**

### 縁の下の雅楽

「縁の下の力持ち」ということわざは、四天王寺の雅楽に由来するとされています。

10月22日に太子殿西庭で「経供養」を行う際に奉納されるのが「縁の下の舞」で、かつては非公開で舞われていました。「人の目には触れないが非常に重要な法会である」ことから変化して、「縁の下の力持ち」になったそうです。

### 楽器ができないと舞えない

雅亮会の楽人になるには、4年間、雅亮会の雅楽練習所に通って約七十曲のレパートリーを習得することが必須になっています。さらに演奏会はオーディションを行ってメンバーを選びます。

練習所では、「舞をしたい」という人にも、まず三管（龍笛・篳篥（ひちりき）・笙）のうち一つを覚えてもらいます。というのは、管ができないと雅楽特有のリズムが身に付かないからです。舞楽のリズムは、理論上は四分の二拍子ですが、西洋音楽のように等拍ではなく、楽譜に表せません。その微妙な息づかいを管の演奏で覚えておかないと、自然な動きができないんです。

### 指揮者がいない雅楽

若いメンバーに「どうして雅楽をしたいの？」と聞くと、「西洋音楽と違って自然な音や呼吸に合ったリズムがいい」と答える人が多いですね。学生時代、ブラスバンドをやっていた人も結構いるのですが皆「西洋音楽は指揮者が意図するよう演奏しないといけないからイヤ。雅楽にはそういう強制がないからいい」と言います。

雅楽にも楽頭という存在がありますが、それは鞨鼓（かっこ）を打ってリズムやテンポを規制するだけで、指揮者ではないんです。

演奏はお互いの呼吸を計りながら始まって、お互いの音を聞きながら、同心円的な音響を作り上げる。しかも自由勝手ではなく約束事もあって調和がとれている。そんなところが、西洋音楽を演奏してきた若者を惹き付けているようです。

## 春～初夏のアート情報満載！『MEET OSAKA Vol.30』配布中

**春**到来！まちにも新しい息吹が感じられますね。暖かな陽ざしにさそわれてつい出かけたくなるこの季節、まち歩きをかねてアート探訪はいかがですか？関西のアート&カルチャー情報には、『MEET OSAKA』をご利用ください。Vol.30（2月19日発行）では3～7月の伝統芸能公演&展覧会をご紹介しています。3月花形歌舞伎や春狂言などが華やかに上方の春を彩り、展覧会では、大英博物館やルーブル美術館と並ぶ古代エジプトコレクションを擁するトリノ・エジプト展が開催中、そして平城遷都1300年記念の大遣唐使展や没後400年を迎える長谷川等伯の大回顧展もまもなく始まります。春から初夏にかけての今号は、見逃せない情報がいっぱい。『MEET OSAKA Vol.30』は、近畿一円の空港、主要駅、ホテル、ツーリスト・インフォメーションで無料配布中です。

※『MEET OSAKA』は、今回のVol.30をもって休刊することとなりました。2001年の創刊以来、多くの皆様にご愛用いただき誠にありがとうございました。

# 大阪ブランド情報局news

◆大阪ブランド情報局は、大阪のさまざまなブランド資源情報を発信するホームページです。
その最新情報のいくつかをご紹介します。

## 『水都大阪2009』が大賞受賞 関西元気文化圏推進協議会賞・贈呈式

**（平成22年1月18日／ホテルニューオータニ大阪）**

関西元気文化圏推進協議会（自治体、経済界など107団体）は、文化を通して関西から日本を明るく元気にした人や団体をたたえる『平成21年関西元気文化圏推進協議会賞』の大賞に、『水都大阪2009』を選び表彰しました。賞贈呈式は文化庁芸術祭と合同で開催。玉井日出夫文化庁長官や協議会代表委員の秋山喜久氏（関西広域機構会長）らが列席のもと、水都大阪2009実行委員長の平松邦夫大阪市長に賞状と記念盾が贈られました。

平松市長は、「水都大阪2009は、平成14年に府・市・経済界による『花と緑・光と水懇話会』で、淀川改修100周年にあたる2009年に水の都をみんなでブラッシュアップしようと発案された。開催にあたっては市民の皆さんの協力を得て、延べ190万人の来場者があった。今後も水の都大阪の魅力発信に連携・継承・継続して取り組んで行きたい」と笑顔で語りました。

関西元気文化圏は、平成15年3月発足のプロジェクト。提唱者は当時文化庁長官だった河合隼雄氏。以後、毎年表彰を行っています。

受賞の喜びを語る平松邦夫大阪市長

## 大阪21世紀協会提供 インテリジェントアレー 専門セミナープログラム

大阪21世紀協会は、大学などの研究機関と連携し、知的成果を社会に活用する“社学連携事業”に取り組んでいます。平成21年度はNPO法人関西社会人大学院連合との連携協定を締結し、同連合が主催する「インテリジェントアレー 専門セミナープログラム」の企画・運営を行いました。平成22年1月から3月のプログラムのテーマは『都市文化論～まちづくり まち育て～』。水曜日の夜、キャンパスポート大阪（大阪駅前第2ビル）で全6講座が開講され、ビジネスマンやまちづくりや地域ブランディングに関心のある人たちが学びを深めました。各講座のテーマと講師は次の通り。(1)都市ブランドを考える／陶山計介、(2)水都大阪による都市再生／室井明、(3)ワークショップ都市・大阪／小原啓渡、(4)コンテンツによる地域おこしの実際／間藤芳樹、(5)開発途上・まちおこしとしての市民力／林信夫、(6)まちづくりと「コア・アイデンティティ」／堀井良殷。

## 交流サロン・21cafe ＜第19回＞開催

**（平成22年1月22日／大阪大学中之島センター）**

**ゲスト：河島　伸子氏（同志社大学経済学部経済学研究科教授）**

**「文化政策の国際比較」**

「ヨーロッパの文化政策には3つのパターンがあります。一つ目は国家的取り組みとして芸術文化を支援するフランス・ドイツ型。統治者が“文化をもって国を構築したいと”の哲学を持ち、予算をかけて文化事業に取り組んでいます。二つ目は社会福祉政策の一環として、国民が文化に接する機会を提供する北欧型。アメリカ文化の侵食からの自国文化の擁護という側面も持っています。三つ目は市場主義をベースに、産業育成政策等に限定して支援を行うイギリス型。国民教化という背景があったため、美術館の入館料が無料であるなど、アクセシビリティという点で評価できます。アメリカはイギリス型に近いですが、フィランソロピーの伝統が強く、個人による寄付が文化を支えています。背景には税制上の優遇措置と、芸術文化に関わることのプレスティージ意識があります。

日本の文化行政を考えるうえでもっとも参考になるのは、イギリス型だと私は考えています。特に国家的補助が少なく、文化に対する理解も不十分な状況で、民間がサービスの内容、利用者への配慮などの工夫をしている状況には、学ぶべき点が大いにあるのではないでしょうか」（当日の河島氏の講話より抜粋）

河島　伸子氏

## 後援･協賛イベント

### 第11回大阪国際音楽コンクール

ピアノ・弦楽器（小学3年生以上）、管楽器・声楽（中学生以上）対象の国際コンクール。世界へ羽ばたく若い音楽家の発掘を目的に開催。◆4月1日（木）～受付開始、予選（テープ審査）後、7～9月・日本および海外にて地区本選、ファイナル10月、グランドファイナル（ガラコンサート）10月11日（月・祝）／高槻現代劇場中ホール／有料／問合せ：大阪国際音楽コンクール事務局☎06－6625－5931、FAX06－6625－5934

### OSK日本歌劇団 レビュー 春のおどり

大阪生誕87年・OSK日本歌劇団によるレビュー「春のおどり」。出演・桜花昇ぼる、高世麻央、朝香櫻子、桐生麻耶、緋波亜紀、折原有佐ほか35名。◆4月3日（土）～11日（日）12：00～、16：00～／大阪松竹座／1等席8,000円、2等席4,000円／問合せ：OSK日本歌劇団☎06－6362－8838、FAX06－6362－8839

### 第14回なにわ人形芝居フェスティバル ～夕陽丘・花祭り～

天王寺区逢阪一帯の寺社で人形劇を上演。寺町の歴史・文化を身近に感じてもらい、周辺一帯の活性化と文化振興を図る。◆4月4日（日）10：00～16：00／大阪市天王寺区逢阪一帯の寺社、劇場等／一部有料（500円）／問合せ：なにわ人形芝居フェスティバル運営委員会事務局☎06－6774－2877、FAX06－6774－4003

### バリアフリー2010

高齢者・障がい者の生活を快適にする福祉機器・製品をはじめ、総合的な福祉情報を発信。◆4月15日（木）～17日（土）10：00～17：00／インテックス大阪／無料／問合せ：バリアフリー展事務局☎06－6944－9913、FAX06－6944－9912

### 「伝統と創意」'10日本書芸院展

文化勲章受章者、文化功労者、日本芸術院会員をはじめ、日本書芸院全役員が大作・力作を一堂に披露。◆4月20日（火）～25日（日）10：00～17：00／大阪国際会議場3階特設会場／無料／問合せ：（社）日本書芸院事務所☎06－6945－4501、FAX06－6945－4505

### 第36回大阪日曜画家展

大阪府内に在住のアマチュア画家に広く作品発表の機会を提供するため、全ての応募作品を展示。◆4月22日（木）～5月7日（金）・日曜休館・10：00～18：00（最終日は15：00まで）／大阪府立現代美術センター／無料／問合せ：大阪府立現代美術センター☎06－4790－8520、FAX06－4790－8522

### 大槻能楽堂 自主公演能

能の魅力を探るシリーズ（解説付き）、ナイトシアター（狂言・能・解説付き）、おやこ教室（ワークショップと公演）など全23公演。◆4月24日（土）～平成23年3月26日／大槻能楽堂／有料／問合せ：（財）大槻能楽堂事務局☎06－6761－8055、FAX06－6761－3399

### 2010日本民謡ジュニアフェスティバル 全国大会

幼児から中学生までの民謡全国大会。コンクール（幼児以外）、75歳以上の高齢者と子どもたちが一緒に歌う企画もあり。◆4月29日（木・祝）10：00～17：00／大阪府立中央図書館ライティホール／無料（整理券発行）／問合せ：（社）全大阪みんよう協会事務局☎・FAX06－6757－7051

### 第55回新世紀大阪展

横浜展（本展）作品と大阪支部所属作者の作品約220点を展示。選抜作者2人展も併催。作者と鑑賞者の交流、大阪における芸術文化の発展に寄与。◆5月11日（火）～16日（日）9：30～17：00／大阪市立美術館／有料／問合せ：大阪支部・芦田☎090－8236－6599・FAX077－564－6558

### Amore e Preghiera Concerto 愛と祈りをこめて

阪神・淡路大震災の被災地西宮在住の演奏家によるコンサート。出演：梅谷裕子（ソプラノ）、梅谷忠洋（フルート）、梅谷一弘（フルート）、門田直子（ピアノ）◆5月18日（火）19：00～21：00／兵庫県立芸術文化センター神戸女学院ホール／3,000円／問合せ：梅谷裕子後援会☎0798－36－3600・FAX0798－22－5061

### SIGN EXPO 2010（第25回広告資機材見本市）

サインという分野にとどまらず、音や光などを含む新しい情報広場として、また、新時代のライフスタイル・デザインのありかたについて考え、関連業界の市場活性化をめざす。◆6月16日（水）～18日（金）10：00～17：00／ATC（アジア太平洋トレードセンター）ホール／無料／問合せ：近畿屋外広告美術組合連合会☎06－6776－8118・FAX06－6776－8055

※<有料>の金額については、各問合せ先にお問合せください。
※ここに紹介する以外にも、大阪21世紀協会は多数のイベントなどを後援しています。

**大阪21世紀協会賛助会員へ入会のお願い**
大阪の活性化のため、皆様のご支援をお願いします。

会　費（何口でも結構です）
■法人会員一口につき年会費10万円
■個人会員一口につき年会費1万円

特　典
1.協会が発行する刊行物の配布
2.協会が主催する各種セミナーなどへの案内
3.賛助会員の参考となる情報・資料の提供など

お問合せ（財）大阪21世紀協会　総務グループ　☎06-6942-2001

大阪21世紀協会広報誌『OSAKA*文化力』

# バックナンバー紹介

大阪・関西で活躍するオピニオンリーダーや文化の新たな胎動を予感させるアーティストらにスポットをあて、提言や日頃の活動を紹介。
協会活動や企業メセナ活動、イベント情報など多彩な話題を掲載しています。
季刊発行で、大阪21世紀協会の法人・個人賛助会員の皆様などにお届けしています。

## No.101（2008年／春号）
**表紙：武田佐知子氏**
（大阪大学理事・副学長）

世界初の細胞融合に成功し生命科学の父と呼ばれる故・岡田善雄氏（大阪大学名誉教授）と、JT生命誌研究館館長の中村桂子氏を招き、生命科学分野における関東と関西の研究手法の違いやバイオテクノロジーの未来像を聞く<巻頭鼎談>。<大阪文化考>では、武田佐知子大阪大学副学長に『21世紀懐徳堂』開設で何を目指すのかをインタビュー。その他、『殯（もがり）の森』で平成19年度関西元気文化圏賞大賞に輝いた河瀬直美監督の受賞スピーチなど。

## No.102（2008年／初夏号）
**表紙：出口最一氏**
（演劇プロデューサー）

本場ブロードウェイミュージカルを大阪で初演するため帰国した出口最一氏と、ミナミ活性化委員会事務局長の中西俊臣氏を招き、トライアウト公演への思いや大阪の演劇文化について聞く<巻頭Talk Session>。<大阪文化考>では、全国初の“食の大学院”設立に向け、発起人の石毛直道氏（国立民族学博物館名誉教授）にインタビュー。大阪の食の歴史と今後の展望を聞く。その他、新進クリエイターの登竜門『大阪ライフスタイルコレクション』レポートなど。

## No.103（2008年／秋号）
**表紙：山崎正和氏**
（劇作家・大阪大学名誉教授）

“好きやねん大阪”キャンペーンの間違い、大阪が“都”になったらどうなるかなど、大阪の文化振興に携って40年の山崎正和氏に積年の思いを聞く<Front Opinion>。東京生まれ育ちの浪曲師・春野恵子氏が、大阪で感じる“空気”や大阪浪曲界の現状を語る<大阪文化考>。木津川計氏（雑誌『上方芸能』代表）、伊東雄三氏（ワッハ上方館長）らによる<21cafe>報告、2008年から大阪本拠地のオリックス・バファローズ<大阪ブランド物語>など。

## No.104（2008年／冬号
**表紙：里中満智子氏**
（漫画家・大阪芸術大学教授）

関西・大阪のブランディング運動の方向性、優れた音楽文化をつくるための批評家育成など、関西経済連合会副会長・寺田千代乃氏と関西フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者・藤岡幸夫氏に聞く<Front Opinion>。大阪で生まれ少女時代を過ごした里中満智子氏が、大阪の文化歴史遺産公開に自身のアイデアを語る<大阪文化考>、『御堂筋学生音楽祭』『アートストリーム イン サントリーミュージアム［天保山］』他、大阪21世紀協会の活動報告など。

## No.105（2009年／春号）
**表紙：北川フラム氏**
（アートディレクター）

財政難による文化事業予算の大幅削減への危機感から、大阪文化の灯を守ろうというメッセージを発信するとともに、新たな可能性を提案する緊急座談会<21cafe拡大版>を特集。大学、経済界、マスコミ、演芸界で活躍中の方々の、さまざまな意見、提案を詳録。巻頭インタビューでは、水都大阪2009のプロデューサー・北川フラム氏に、大阪の都市再生に果たすアートの役割や水都大阪2009をきっかけとした“まち育て”活動の方向性などを聞く。

## No.106（2009年／夏号）
**表紙：佐藤茂雄氏**
（京阪電鉄(株)代表取締役CEO）
**伴 一郎氏**
（伴ピーアール(株)代表取締役）
**二見恵美子氏**
（E.M.Iプロジェクト代表）

水都大阪の再生に活躍する佐藤茂雄氏、伴 一郎氏、二見恵美子氏を招き、大川・中之島周辺での船上座談会を収録<Front Opinion>。水辺のある都市の魅力、子どもが憧れるような大人文化などを語り合う。その他、『第1回なにわなんでも大阪検定』レポート<大阪元気文化を掘り起こせ>、劇団四季女優・木村花代さんインタビュー<大阪文化考>、ミナミ今昔<大阪ブランド物語>など。

## No.107（2009年／冬号）
**表紙：有森裕子氏**
（NPO法人スペシャルオリンピックス日本理事長）

めがねをかけずに見られる3D立体画像開発を推進する宮原秀夫氏（(独)情報通信研究機構理事長）と、火を噴くロボット船『ラッキー・ドラゴン号（水都大阪2009）』の作者・ヤノベケンジ氏（大型機械彫刻作家）を招き、サイエンスとアートのコラボレーションの近未来像を聞く<巻頭鼎談>。第46回大阪文化祭賞（平成21年度）の受賞者紹介と同賞の今後の課題を考える<大阪文化考>、会場整備が大詰めを迎えた上海万博現地ルポなど。

■バックナンバーをお譲りします。
下記、大阪21世紀協会・大阪ブランドセンターまでお問合せください。ただし残部がある号に限ります。

財団法人大阪21世紀協会
〒540-0032 大阪市中央区
天満橋京町1-1
大阪キャッスルホテル4階
TEL.06(6942)2001
FAX.06(6942)5945

■大阪21世紀協会ホームページでもご覧いただけます。
http://www.osaka21.or.jp/

財団法人 大阪21世紀協会
ホームページ http://www.osaka21.or.jp
発行日／平成22年3月22日
発行・編集／財団法人大阪21世紀協会 〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町1-1 大阪キャッスルホテル4階 TEL.06(6942)2001 FAX.06(6942)5945
発行人／佐々木洋三　編集統括／髙橋英子　編集協力／株式会社インサイト　印刷／株式会社NPCコーポレーション

本誌は再生紙を使用しています。